

雄国沼は火山でくぼんだ地形(カルデラ)にできた沼で、猫魔ヶ岳や雄国山などの山に囲まれている。沼の面積は45haで、周囲が約4kmあって、最大水深は8m、生息する魚はアブラハヤ・フナ・ユイ・ドジョウなどで、雄国沼の周囲の湿原面積は180ヘクタールもある。



雄国沼湿原は、高層湿原・中層湿原・低層湿原がみられる。高層湿原は枯れ葉が分解されずに積もり、中央がもり上がった地形になり、雨水だけで植物が育つ。

低層湿原は地表水や地下水で植物が育つので、沼や川の近くにあり、ヨシなどが生えている。

コバイケイソウは雨水を無駄にしないためにスプーン形の葉で雨水を根元に流す。ホロムイイチゴは福島県が南限の植物で数も少ないから県の絶滅危惧種に指定されている。レンゲツツジやニッコウキスゲが花を咲かせる6月中旬～7月上旬は、観光客が集中し、植物の盗掘、湿原の踏み荒らし、ゴミ捨て、車の渋滞などが問題になった。観光客の過剰利用を解消するため2005年から観光シーズンにマイカー規制が行われている。

レンゲツツジは周辺の木がのびたために日当たりが悪くなって弱りつつある。花を見に来た観光客のためにレンゲツツジ以外の木を切るべきか、それとも自然公園だから自然の成り行きにまかせるべきか、難しい選択を迫られている。

雄国沼の水は、古くから喜多方市方面の農業用水に利用されてきた。沼の北西部にトンネルを掘って水を取り始めたのは江戸時代のことで、昭和の初めには、沼の水位を上げるために雄子沢川への出口に堤防が築かれた。それにより湿原の一部が水没してしまった。沼の周りにあったブナ林は堤防工事の際に伐採され、その後植えられたレンゲツツジは観光資源の一つになっている。

柳沼を除く五色沼の水は、PH4～6程度の酸性で、1994年、瑠璃沼から流れ出る川の中から古い一円玉を拾い上げたら、一円玉が薄くなっていて穴が開いていた。酸のせいで一円玉が溶けていたと考えられる。魚は、一部の沼にウグイやアブラハヤが生息している。毘沙門沼には人が持ち込んだニシキゴイやブラックバスなどもみられる。沼の底には、酸性に強いウミカマゴケ育っている。



銅沼は、毘沙門沼のようなエメラルド色を作り出す水系とは異なるため、独特の色をしていて、五色沼湖沼群の中ではもっとも酸性が強いため、沼周辺の草や倒木などに沼の中の鉄分が付着して、その名の由来を作り出している。



深泥沼は、三つの色をもっていて奥の方が濃い瑠璃色で、手前が明るい黄緑色で、その間に帯状の茶色が混ざっている。これは、沼の水が複雑に流れていることによると思われる。深泥沼を実際に見てみて、本当に三色になっていてびっくりした。

